防災セミナー参加の記録

椿木紀男

「防災・減災について考えよう」セミナーに参加して

はじめに

私は、神奈川県建築士会の会員で、横須賀支部に属しています。

2013 年 7 月 20 日、神奈川県建築士会の女性委員会と防災委員会のコラボセミナー「防災・減災について考えよう」に参加しました。貴重な経験でしたので、報告として記録に残しておきます。

2013 年 7 月 20 日（土）13：30-17：00

於：開港記念会館 7 号室

主催者の女性委員長・浦絵美氏のあいさつの後、防災塾・だるま塾　白田克雄理事の「避難所に関する講義」がありました。

ワークショップの概要

セミナーの中心は、避難所を運営する机上トレーニング・ゲームのワークショップで、同じくだるま塾の中村俊光理事の指導で、1 時間の予定で進められた。具体的には、各班 6 名で、6 班が全く同じテーマに取り組むゲームです。

それぞれの班に運営委員が配され、残る 5 人の中からリーダーと書記を選びます。

以下わたしが所属した、A 班について報告します。

まず、それぞれがどういう仕事をしているかを含めて自己紹介しました。その後、リーダーには建築事務所勤務の男性 I 氏、書記は同じく建築デザイナーの女性 N さんと I さんが選びました。残るメンバーは特養老人ホームの施設長で女性の Y さん、運営委員からは女性委員長の浦さん、そして退職大学教員で構造専攻の私と言う班構成でした。

ワークショップの中身は始まるまで私は全く、知りませんでしたが、直感的に避難所の運営という観点から A 班のメンバー構成は理想的かなと思いました。

条件設定

最初に、浦さんから、条件設定として以下の 4 点が示されました。

・小田原に午前 6 時にマグニチュード 8 の地震が発生。
・津波の発生はない。
・避難所は横浜市内の小学校で主として体育館に避難者を収容する。
・運営開始は午前 10 時

この条件の理解について、まず、皆さんから私に、被害はどの程度生じるのか、体育館や校舎に被害は生じていないだろうか、との質問が出ました。

私の大まかな予測では、小田原でマグニチュード 8 ですと、横浜の場所によっては震度 7 もありうるので周辺地域の被害はかなりひどいであろうと答えました。一方、横浜市は学校が避難所になることも考慮して十分な耐震性能を確保するように補強し、すでにすべての小中学校は補強済みであるので、避難所機能は確保されていると判断して良い、と答えたのでした。

私からは、周辺被害が深刻ということは、相当数の避難住民が避難所に来られることを念頭に置く必要があることを強調しました。それと、この条件設定で理解しにくいのは、午前 6 時の地震に対して午前 10 時運営開始ですと、場合によるともう手をつけられないような混乱状態になってしまっていることも想定されるので、設定の意図が理解にしにくいものの、ただ、夜ではないので、住民はグラウンドなどで待機していたと想定してはじめましょう、と提案しました。

ゲーム開始

浦さんの手から、順次、カードがリーダーに渡されます。（以下は記憶をたどって書きますので、内容、順序とも正確ではありません。）

・介護を要する 90 歳のおばあさん、うつ病の奥さんとご主人が到着。

最初から難題です。出入り口、トイレ位置、人の出入り状況など考慮して、体育館の奥のコーナー付近に場所を確保していただくこととしました。

・60 代のご夫妻と青年

まず、大きくゾーンを分けよう、という意見が出ました。「要介護のゾーン」「元気ゾーン」に分ける。あとで、カードをよく見ると、家屋の被害が崩壊と一部損壊の記述があることに気づきました。そこで、「元気ゾーン」をさらに「元気・家屋被害大ゾーン」、「元気・一部損壊ゾーン」に分けました。被害大ですと避難所生活が長くなり、一部損壊は早めに帰宅できるのでは、という配慮でした。これに、もう 1 つ「スタッフ・ゾーン」を確保しました。

・若いご夫妻と泣きわめきが止まらない子ども連れの家族

子供は、大地震で異常興奮状態となっている可能性があり、子供ゾーンが必要とのことで、大きくとっていた「スタッフ・ゾーン」の半分を「子供ゾーン」にしようと決めました。

大きく 5 つのゾーンに分け、その間に通路の空間を設けました。その後は、さまざまな家族をそれぞれのゾーンに振り分けました。

ところが、犬を連れて来られた家族が来られました。ペットをどうするか、議論は長引きました。ペットは無理という意見と何とかならないかとの意見にわかれ、なかなか結論が出ませんでした。そこで、私から、保留して最後にもう一度考えましょう、ということになりました。

今度は、マイカー内で寝泊まりしたいので、校内に駐車させてほしいと言う人が現れました。これも意見は割れました。最終的には、自身のショックで建物内

に入れない精神状態の人なので、駐車場に受け入れましょう、ということになりました。難しい判断ですが、避難所から離れたところで一人生活されると、救援物資など届かないので受け入れようということになりました。しかし、収容台数に制限があることから、リーダーはやや不安の様子でした。

救援物資として毛布が届いたのですが、何枚受け取ることにするか、という判断が求められました。建築のデザイナーのリーダーが、図面から読み取って、体育館に最大何人収容できるか、を推定しました。と言うのも、大被害が想定できましたので、最終的には体育館は満杯になるだろうとの判断でした。300 人と算定され、特養の施設長の Y さんによれば毛布は硬い床の体育館ですので、一人 3 枚必要とのことで思いきって 1000 枚を受け取っておこうということになりました。

いろいろの難題

以上のほかに、シャワーや仮設トイレの位置の決定がありました。2 つとも男女に区分をし、男子用はあまり神経を使いませんでしたが、女性用は避難所や教室等から離れすぎず、かつ目立たないところを探す必要がありました。

すでに水が流れなくなった状態で使われたトイレで汚物が山盛りになっているのをどうするか、と言うのもありました。極めて切実な問題ですが、1995 年の阪神淡路大震災時の私が遭遇したことと全く同じことでしたので、グラウンドの片隅に穴を掘って埋めましょう、と助言しました。

幾つかの提案

終了時間前にすべてのカードが処理されましたので、保留の犬の件に戻りました。結局、カードには室内犬、室外犬の別がないので、室外犬ならグラウンドの一角に、室内犬ならスポーツ用具庫の一角に置くことにしました。

その後、カードをよく眺めましたら、町名（東町、西町、南町など）が書いてありましたので、ゾーンをさらに区分分けしてご近所同士で避難できるようにすることや、元気な人たちにはスタッフになって支援する側に入っていただこうと、図面にはかきいれられませんでしたが、運営の提案も出されました。

感想

はじめての体験でした。避難所の運営がこんなにも緊張するものかと思いました。チームメンバーに現役の建築デザイナーが 3 人（運営委員含めて 4 人）いたこと、特養の施設長がおられたことが、このゲームをすすめる、つまり施設運営の大きな原動力となったと思いました。ともかく、皆さんの考えが適切で、決断が速いのです。加えて、1964 年新潟地震以来国内外の多くの災害を見、大学で地震防災論（後に地震工学概説に名称変更）という科目を 1980 年初頭に作って長く自ら担当していた私の判断も、有効だったのではと思っています。

現実の避難所の運営も組織化する時にそれぞれの専門、経験が生きる人選や配置を考えることが大事だと思いました。（2013 年 7 月 24 日　記）

写真　上・ゲーム風景
　　下・筆者の所属チーム

追記　**2013 年 7 月 25 日の朝日新聞朝刊（抜粋）**

「災害時の避難所整備・運営―高齢・障害者の支援強化<内閣府指針案>

災害時の避難所の整備・運営について、内閣府がまとめた指針案の内容がわかった。お年寄りや障害のある人ら「要援護者」への支援や避難所にいない在宅被災者への配慮が主な柱だ。関係省庁と調整したうえで、近く全国の市町村に通知する。国が市町村向けにこうした指針をまとめるのは初めて。」

以上のような書き出しの記事で、指針案の抜粋、学者のコメント、さらに大船渡市の女性（48 才）の体験談で自閉症の子(22 才)を抱えての避難所生活の苦労談などが記されています。

まだ、案の段階なのか、インターネットでは探せませんが、そのもとになる資料は次のウエブでの討議資料が参考になりそうです。

http://www.bousai.go.jp/taisaku/hinanjo/h24_kentoukai/